



「ディナーラッシュ」"dinnerrush" ●●● 最終回

“Best served” 「後味も格別だ」

都会のレストラン・カルチャーのドキュメンタリーを楽しみながら、血みどろの復讐劇は予想外の方法で決着する。惜しまれながらの最終回、ジラルディ監督の気の利いたもてなしに身を任せて極上の快樂を味わおう。

文=中野香織



豊かなウィットとゴージャス映像。有名シェフもこぞって絶賛する“レストラン映画”。配給はシネマパブリジャン (Tel.03-5786-1590)。9月ロードショー。

脳が快樂を感じるメカニズムについて、作曲家でピアニストのロバート・ジャーデインは **'Music, the Brain & Ecstasy** (音楽、脳、エクスタシー)' という著書のなかでこんなことを言っています。

快樂は期待が満たされるときに生じる。ただし、深く大きな快樂は、期待の逸脱から生じる、と。たとえば聴き手に深い快樂を与える音楽とは、聴き手の期待をじらし、逸らし、時にはそこから大きく後退しながら期待を高めるだけ高めておいて、最終的にはすべての逸脱要素を動員してその期待を満たすような音楽である、と。

「音楽」を「映画」と置き換えることも、もちろん可能です。そして『ディナー・ラッシュ』にはこの法則があてはまります。

冒頭のシークエンスでいきなり陰惨な殺人のシーン。イタリア系ギャングの関わる血みどろの抗争を予期していると、タイトルのあとはトーンが一転、大繁盛のイタリアン・レストランの厨房と店内を舞台にしたロバート・アルトマン風の群像ドラマが盛り上がっていきます。

一見、「逸脱エピソード」ばかりに見えるこのレストランで展開されるドラマは、もちろん観客の最終的な期待を満たすためのピースでもあるわけですが、そんなドラマツルギーから独立した都会のレストラン・カルチャーのドキュメンタリーとしても面白いのです。というか監督が撮りたかったのはこっちのドキュメンタリーの方で、殺人とその落とし前の物語はおまけのサービスかもと思えてくるほど(それもそのはず、監督のボブ・ジラルディ自身がレストラン経営者で、撮影に使われているのも監督所有のレストラン「ジジーノ」だそう)。

When did eating dinner become a Broadway show?

「いつ食事が芝居見物になった?」
バーカウンターに座る客のひとり、金融マンのケ

ン(ジョン・コルベット)にこう言わせてしまうほど、店内はさながらセレブ劇場。

ウェイターやウエイトレスもそれぞれ個性が際立っていて、傲慢な客をウィットの効いたセリフ一言でびしりと小気味よくむち打ってきます。

たとえば、ギャングに渡した封筒の中身を教えろ、と強硬に迫る刑事にウエイトレスのパイパー(テッサ・ガイリン)はどう切り返すかというと、

Drury: I'm a detective. I could force you to tell me.

(私は刑事だ。仕事だよ)

Piper: And I'm a Capricorn. You can't force me to do shit.

(私は山羊座よ。押しつけは大きらいなタチ)

また、アーティストでもあるウエイトレス、マルティ(サマー・フェニックス)は、画廊オーナーのフィッツジェラルド(マーク・マーゴリス)にさんざんコケにされますが、最後にはこんなリベンジの一言で決めます。

Fitzgerald: I'll leave her my card, she can show me her slides. We'll see whether she's really an artist or merely a waitress.

(彼女には名刺を渡すよ。作品をみてアーティストか判断する)

Marti: Thanks for the thought. But I'd rather you leave me a big tip.

(お気持ちには感謝します。でも名刺よりチップを)

こんな応酬の数々に笑っている間にも、頭の片隅では冒頭シークエンスでインプットされた「血みどろの予感」が通奏低音のように鳴り響いているわけですが、その緊張が限界にまで高まった頃

ついに、最終的に、唐突に、まったくもってうれしくなってしまうほどの予想外の方法で、血みどろの決着がつけられます。

その事態を前に呆然とするシェフをなくさめる料理評論家フリーリー(サンドラ・バーンハード)のセリフがまた効いています。

Unbelievable. Only in New York can you count on a double murder to triple your business. You'll be booked solid for a year.

(死体二つで売り上げが三倍になるのがニューヨークよ。一年後まで安心ね)

ラストを締める古いことわざの使い方も絶妙です。レストラン・オーナーのルイス(ダニー・アイエロ)と会計士のゲイリー(ジョン・ロスマン)の会話ですが。

Louis: You know, they say revenge is a dish best eaten cold.

(知ってるか。「復讐とうまい料理はあとを引く」)

Gary: Served.

(「格別だ」)

Louis: What?

Gary: Best served.

(「後味も格別」だ)

この字幕は意識されたものです。'Revenge is a dish best served cold'ということわざの本来の意味は、「復讐は冷めた頃に出されるとうまい料理である」。観客にレストラン・ジジーノでのセレブ・ドラマを見せながらじりじりと待たせ、ほどよく冷ました「復讐」をあっさりと供す。ジラルディ風の観客のもてなし方のレシピでもあったわけですね。(終)